

## まえがき

本報告は、平成 7 年に実施した流動研究タスクフォース「ミャンマー経済調査」（主査 桐生稔）の成果の一部である。

95 年 7 月 10 日、ミャンマー軍政は 6 年間に亘って自宅軟禁していたアウンサン・スーチー女史を解放した。同女史の解放は、軍政にとってきわめて効果的な宣伝となった。なぜならば、そのタイミングが 7 月末に開かれた A S E A N 外相会議の直前であったからである。ミャンマーは近年市場経済化に着手し、その本格化のためには、民間外資の導入と O D A 再開が必要不可欠であるという認識が軍政内で強まっていた。更に軍政の政治的状況に対する自信もうかがえる。特に 92 年の柔軟路線への転換以降アジア諸国から一定の評価を得、懸案であったカレン族軍が内部崩壊して少数民族問題もほぼ解決した。軍政は民政移管への条件として憲法制定とそれに基づく二院制議会の成立を約束しており、憲法草案も 96 年中に国民に提示できる予定になっていた。これらの諸事情が、スーチー女史の解放の背景にあったと考えられる。

こうした最近のミャンマー情勢を分析するため、6 月に桐生（中部大学）を主査として、西澤信善（神戸大学教授）、横田高明（中部大学教授）、峯陽一（中部大学講師）及び高橋昭雄（アジア経済研究所在ヤンゴン海外調査員）をメンバーとするタスクフォースが結成された。この緊急リポートは、スーチー女史の解放を契機として、あまり知られていないミャンマーの最新政治・経済状況を簡潔に紹介するものである。なお同タスクフォースによるミャンマーの包括的リポートは、本年 11 月末に『アジア研トピック・リポート』として刊行される予定である。

1995 年 8 月

桐生 稔